クラス	QA304	担当教員	鷲見　聡（スミ　サトシ）

テーマ	発達障害児・障害児の支援の過去、現在、そして未来
著書･論文 研究課題等	【主な著書】『発達障害の謎を解く』単著、日本評論社、2015 年 【主な論文】「名古屋市西部における自閉症スペクトラム、精神遅滞、脳性麻痺の頻度について」『小児の精神と神経』51 巻 2011 年 「自閉症スペクトラムの原因論―人間の多様性のひとつとして捉える」『そだちの科学』11 号　2012 年 「言葉遅れを主訴に受診した幼児の診断分類」『小児科臨床』65 巻 2012 年 「発達障害と環境要因」『子どもの健康科学』17 巻　2017 年 「インターネット依存の現在」『こころの科学』194 巻　2017 年 【研究課題】発達障害児･障害児の支援

ゼ ミ ナ ー ル 概 要

キーワード：発達障害、多様性、知的障害、肢体不自由、生命倫理

目的、内容、方法、授業計画等：

・過去の歴史を振り返ると、誤解･偏見のために、発達障害児や障害児たちが悲惨な状況に置かれ、大混乱陥ったことが度々ありました。例えば、数十年前に、自閉症の原因は育て方の問題であるという「自閉症心因論」が唱えられ、いわれなき批判を親たちが浴びました。比較的最近にも、科学的根拠のない「自閉症水銀説」が流布され、一部の子どもたちに誤った治療が行われました。その一方で、以前の社会形態には、現代社会より良かった面があります。例えば、発達に偏りがあっても就労しやすい職場が多かったと言われています。温故知新という言葉のように、過去の歴史を調べ、その教訓を現在に生かすための議論を行います。

・ここ 10 年の間、発達障害の医学的な診断分類は度々変更され、新たな診断名称が使われるようになり、「自閉症スペクトラム」の概念も広まりました。また、発達障害児の支援方法や支援体制も、大きく変わりました。そのため、支援の最前線で必要な知識は、古い教科書の内容のみでは不十分です。そこで、発達障害に関する最新の文献を読み、新しい知識を身につけます。そのことは、卒業論文の作成や、将来の実践研究のための基礎にもなります。

・生命科学は飛躍的進歩をとげ、生命現象に介入する技術を人間が持つようになりました。例えば、知的障害の原因となる染色体異常の出生前診断が可能になりました。しかし、技術ばかりが進歩しても、人々の幸福には繋がるとは限りません。生命の尊厳を脅かしたり、障害･発達障害に対する偏見が強くなることを危惧する声があります。そこで、発達障害・障害にも関係する、生命科学の基礎的知識について学び、生命倫理について意見交換をします。

・発達障害･障害児の支援は、将来どの方向に進むべきでしょうか？発達障害児・障害児が暮らしやすい社会にするには、何が必要でしょうか？支援の未来について、一人ひとりがじっくりと考え、アイデアを出し、議論しましょう。

担当教員からのメッセージ

担当教員は、小児科医として発達障害児や障害児への医学的支援に長年携わってきました。その間、発達障害に関する状況は大きく変化しました。支援現場では少なからぬ混乱が生じ、一般の人々の間で誤解や偏見が広まったこともありました。これから先 10 年 20 年の間にも、発達障害児や障害児の支援について、様々な変化が生じると予想されます。したがって、卒業後も、新しい知識や考え方を学び続けなければなりませんが、その時には講義を受講することは困難です。そのため、自分自身で新たな知識を身につけ、自分自身で考えることが重要となります。ゼミの活動を通じて、自分自身で自発的に行う姿勢を身に着け、新たな時代の良き支援者になることを期待しています。